根 来 寺 坊 院 跡

平 成 4 年 度

財団法人 和歌山県文化財センター

例　言

1　本報告は、国庫補助事業平成４年度根来寺坊院跡の発掘調査の概要報告である。

2　発掘調査は、和歌山県教育委員会の指導のもと、財団法人和歌山県文化財センターが実施した。

3　調査面積は、約245m^2で、調査期間は平成５年１月18日から調査を始め平成５年３月10日に終了し、整理作業は、３月25日に終了した。

4　発掘調査は、文化財センター主査冨加見泰彦が担当した。

5　調査の組織については、下記の通りである。

和歌山県教育委員会

参事（文化財課課長事務取扱）	武部古宏
文化財課副課長	上田健三
〃　〃	高橋　彬
〃　課長補佐	吉田宣夫
文化技術班主任	藤井保夫
〃　主査	山本高照

財団法人和歌山県文化財センター

専務理事（事務局長兼務）	鍋島伊津夫
事務局次長	菅原正明
埋蔵文化財課　課長	辻林　浩
管理課　課長	松田正昭
埋蔵文化財課　主査	冨加見泰彦

調査委員

岡田英男　（奈良大学教授　・県文化財保護審議会委員）

濁磨正信　（日本考古学協会員・県文化財保護審議会委員）

巽　三郎　（日本考古学協会員・県文化財保護審議会委員）

都出比呂志（大阪大学教授　・県文化財保護審議会委員）

藤沢一夫　（四天王寺国際仏教大学名誉教授・県文化財保護審議会委員）

6　発掘調査並びに本書の作成には児野和徳、高木秀明、藤井宏和、西口朗弘各君の助力を得た。

7　本書の遺物実測図と遺物図版に付した番号は一致する。また、土器の実測図は１／４、瓦の実測図については１／４を原則としたが、１／６のものもある。

8　本書の執筆・編集は冨加見が行なった。

目　　次

例　言
Ⅰ　調査の経緯 …… 1
Ⅱ　調査の方法 …… 3
Ⅲ　調査の成果 …… 4
（1）各トレンチの成果 …… 4
ア　Aトレンチ …… 4
イ　Bトレンチ …… 4
ウ　Cトレンチ …… 4
エ　Dトレンチ …… 5
オ　Eトレンチ …… 5
カ　Fトレンチ …… 6
キ　Gトレンチ …… 6
ク　Hトレンチ …… 6
（2）出土遺物 …… 6
Ⅳ　まとめ …… 8

挿 図 目 次

挿図1　根来寺坊院跡位置図 …… 1
挿図2　根来寺坊院古絵図 …… 2
挿図3　トレンチ設定図 …… 3
挿図4　Cトレンチ遺構実測図 …… 9・10
挿図5　Eトレンチ遺構実測図 …… 11・12
挿図6　Fトレンチ遺構実測図 …… 13・14
挿図7　A・Bトレンチ遺構実測図 …… 15
挿図8　D・Gトレンチ遺構実測図 …… 16
挿図9　根来寺坊院跡出土軒丸瓦実測図 …… 17
挿図10　根来寺坊院跡出土軒丸・平瓦実測図 …… 18
挿図11　根来寺坊院跡出土軒平瓦・鬼瓦実測図 …… 19
挿図12　根来寺坊院跡出土瓦塼類・土器実測図 …… 20

図 版 目 次

図版1　上　根来寺坊院跡全景　・　下　調査区近景

図版2　上　Aトレンチ全景　・　下　Aトレンチ

図版3　上　Aトレンチ石垣検出状況　・　下　Aトレンチ土層断面

図版4　上　Bトレンチ調査前　・　下　Bトレンチ調査風景

図版5　上　Bトレンチ土層断面　・　下　Bトレンチ整地状況細部

図版6　上　Cトレンチ調査前　・　下　Cトレンチ石垣検出状況

図版7　上　Cトレンチ石垣検出状況　・　下　Cトレンチ石垣検出状況

図版8　上　Dトレンチ全景　・　下　Dトレンチ石垣検出状況

図版9　上　Eトレンチ調査前　・　下　Eトレンチ全景

図版10　上　Eトレンチ石垣細部　・　下　Eトレンチ石垣細部

図版11　上　Eトレンチ石垣　・　下　Eトレンチ石垣細部

図版12　上　Eトレンチ全景　・　下　Eトレンチ下層断面

図版13　上　Eトレンチ下層状況　・　下　Eトレンチ下層状況

図版14　上　Fトレンチ調査前　・　下　Fトレンチ全景

図版15　上　Fトレンチ石垣検出状況　・　下　Fトレンチ石垣検出状況

図版16　上　Fトレンチ土層断面　・　下　Gトレンチ全景

図版17　上　Gトレンチ排水溝　・　下　Hトレンチ土層断面

図版18　軒丸瓦

図版19　軒丸瓦・軒平瓦

図版20　軒平瓦

図版21　軒平瓦・鬼瓦

図版22　鬼瓦・塼・土師器

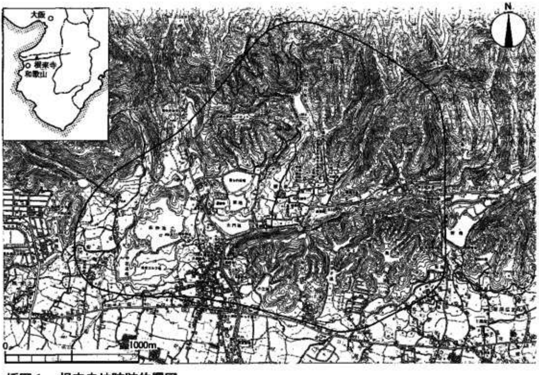
I　調査の経緯

根来寺坊院跡は、東西に連なる和泉山脈の山麓と、その南側を並行して延びる前山にはさまれた谷筋にある。平安時代末期に覚鑁が根来寺を開基して以来、この地は新義真言宗の聖地として中世には一大隆盛を誇った。

根来寺は、豊臣秀吉によって、焼き討ちされる天正13年（1585）直前の最盛期には山内に２千とも３千ともいわれる塔頭が建ち並び、ルイス・フロイスの『日本西教史』によると「彼らの寺院なり屋敷は、日本の仏僧寺院中、きわめて清潔で黄金に包まれ絢爛豪華な点において抜群に優れている」と、当時、最も裕福で豪華な寺院であったと伝えている。

この根来寺にはじめて発掘調査の手が入ったのは1976年のことで、山内を分断する形で計画された広域農道の建設工事が契機であった。その後、1980年から1989年にかけて第１次10ヶ年計画を策定し、調査を実施した。

平成２年度からは、新たに第２次５ヶ年計画に着手し、根来寺坊院跡遺跡を保存活用し、史跡整備にむけての調査を進めることとなった。本年はその３年目の発掘調査である。

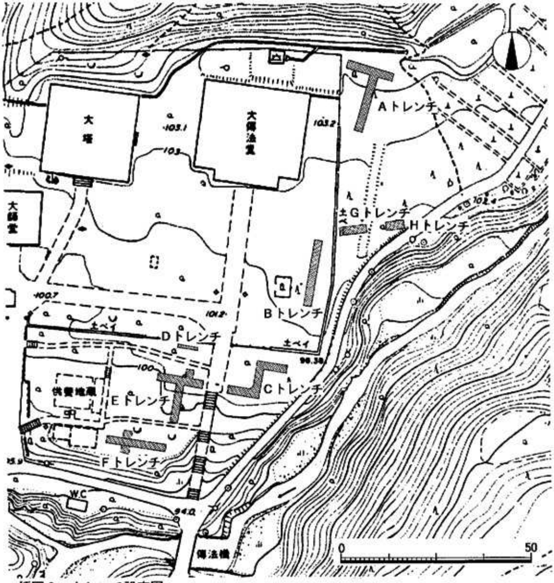


挿図１　根来寺坊院跡位置図

挿図２　根来寺坊院古絵図（『根来大伝法院700年記念根来寺展』1988から引用）

II　調査の方法

根来寺坊院跡の保存と活用を図るための継続事業であり、今年度は、根来寺創建期の大伝法院の実態をさぐることがその目的である。そのため旧大伝法院を中心として、現存する「根来寺伽藍古絵図」（挿図２）に見られる門跡、馬頭観音堂跡、不動堂跡、普賢院跡を調査地点として選び発掘調査を実施した。調査は、幅２ｍのトレンチを計８カ所に設定した。それぞれのトレンチにはＡからＨまでのアルファベットを冠した（挿図３）。



挿図３　トレンチ設定図

III　調査の成果

（1）各トレンチの成果

先述した門跡、馬頭観音堂跡、不動堂跡、普賢院跡とみられる地点に設定したトレンチの概要について以下記述する。

ア　Aトレンチ（挿図7、図版2・3）

大伝法院の東側に設定したトレンチである。東西方向に設定したトレンチでは西端で大伝法院側に面を持つ石列を検出した。石列の方向は大伝法院にほぼ並行する。石列の検出は1段分で、それより上部に積まれていたか否かは不明であるが、上層は撹乱が著しく石材が多く散乱する状況であるため石垣があった可能性もある。石列の内側では建物の痕跡を検出するには至らなかったが地山直上に、規則性はないが礎石とみられる扁平な石が認められることと、土師器の小皿で、黒く変色し燈明皿として使用されたと考えられるものや、瓦が出土することから建物がかつて存在した可能性も考えられる。

南北方向に設定したトレンチはその南半分は菩提川へ向かって緩やかな傾斜を示している。湧水のため地山面まで掘り下げることが不可能で、前述の石列の範囲を確認するにはいたらなかった。

イ　Bトレンチ（図版4・5）

大伝法院の南東に南北に設定したトレンチである。建物等の検出は認められなかった。表土直下に薄い焼土層が存在するが近世以降と見られる。焼土層の下層は人頭大あるいはそれ以上の和泉砂岩の角礫を含む黄色土となる。この黄色土の下層は大きな礫が不規則な状態で認められる。整地の所産であろうか。約1.8m掘りさげたが、湧水のため、地山を検出するには至らず、天正の兵火とみられる焼土も確認できなかった。

遺物は、江戸初期の土師器小皿類と、五輪塔の一部がこの黄色土中、表土から約1m下層で出土している。

土層の観察と出土した遺物から判断して、この黄色土は江戸時代に再建された大伝法院に関わる地業であると考えるのが妥当と思われる。この時期に現在の状況に近い景観に整備されたと考えられる。

ウ　Cトレンチ（挿図4、図版6・7）

大伝法院正面に位置する階段東側に設定したトレンチである。現在の階段は、大伝法院とは軸線が東へ偏しており、後世の所産と考えられる。このトレンチでは、土塀跡の基礎部分を検出した。

土塀の基礎と見られる遺構は、後に述べるＥトレンチとは階段を境として左右対称に認められる。

基礎は大伝法院の前面にひろがる平坦地の先端部に位置し、階段が取り付けられていることからもわかるように土塀基礎の南側は菩提川に向かって斜面となっている。階段踊り場から東に延へ約10m延びた後、120度の角度をもって屈曲し、北へ約６m延び現存する土塀へと続くが南北方向の基礎は、東西方向に比べて遺存状況が悪い。

この土塀基礎は残りの良いところで計測すれば、幅約50cm、高さ約30cmで石材は全て和泉砂岩を利用している。

東西方向の土塀基礎の南側では土塀が倒壊した痕跡とみられる瓦類、スサ入りの堆積土が僅かではあるが見つかっている。土塀の時期は基礎の石垣から出土した遺物から近世以降と考えられるが時期を限定するにはいたっていない。

エ　Ｄトレンチ（挿図８、図版８）

大伝法院、大塔を囲む土塀に並行して設定したトレンチである。地山は表土から約50cm下層で検出した。地山直上は僅かに焼土が見受けられ、天正の兵火の痕跡とも考えられる。地山面から約10cm上で石列を検出した。トレンチの幅が１mと限られているため、その性格については不明であるが、Ｅトレンチで検出した石垣からは延長線上にあたることから同施設の一部と解することができる。遺物が伴わないため時期を限定することはできないが、石垣は火を受けている痕跡が認められないことと、火を受けていると見られる地山からはやや遊離した状態で検出しているため天正の兵火以後の所産とみられる。

上層は土塀の倒壊した際の瓦の堆積層（近世以降）を検出した。瓦の堆積はＣトレンチの状況とほぼ同様である。

オ　Ｅトレンチ（挿図５、図版９～14）

大伝法院正面の階段左側に設定したトレンチである。Ｃトレンチの石垣とは左右対称となる土塀基礎の石垣を検出した。本来は階段を中心として、左右に土塀が築かれていたと考えられる。検出した基礎の長さは東西５m、南北3.5mの規模を有する。Ｃトレンチ同様約120度の角度をもって現有の土塀へと続く。

この土塀の基礎と重複する東西方向の石列を検出した。重複関係からはこの石列の方が古いとみられるが時期は不明確である。Ｃトレンチでも延長線上と見られる位置に石列が僅かに残されているのを確認しているが性格については明らかでない。

この東西方向の石列と直交するようにＥトレンチ西端で幅約１mで両面に面をもつ石垣を検出した。この地は古絵図（挿図２）によると唐門の位置にあたるとみられることから唐門に付随する施

設の蓋然性が高い。ただ、石垣の内側は土が充填されているが、硬く締まった状態とはいえず、通路などの可能性はないとみられる。

一方、この石垣の約1m下層では天正の兵火の際、生じたとみられる焼土層が検出された。しかし、トレンチ調査であるため、確認したにとどまった。

南北に設定したトレンチでは約2m掘りさげたが、近世以降の整地土が厚く堆積し、地山面及び天正の焼土面は検出できなかった。整地土中には中、近世の瓦塼類が多く含まれており、整地の造作は近世以降とみられる。Bトレンチで確認した大伝法院の再建の際の整地とあるいはこの整地は軌を一にしたものとしてとらえることが可能であろう。

カ　Fトレンチ（挿図6、図版15～17上）

Eトレンチの下方に設定したトレンチである。Eトレンチで検出した両面に面をもつ石垣の南延長線上にあり、石垣のコーナーとみられる遺構を検出した。現地形でも、隆起した地形が認められることから、EトレンチからFトレンチにいたる一連の遺構と考えられる。

遺物は土師器の小皿が埋土中から出土しており、これによって石垣の時期が江戸初期にさかのぼる可能性が高いことが考えられる。このトレンチでは地山を確認するため約1.9m掘り下げたが確認できなかった。

キ　Gトレンチ（挿図8、図版17下）

Aトレンチの南側に設定したトレンチである。客土下から石組の排水溝を検出したが、時期は不明である。周辺からは、瓦類が僅かに出土しており、この溝が建物等に付随する雨落溝の可能性もあるが、調査範囲のなかでは建物遺構を検出するにはいたらなかった。

ク　Hトレンチ（図版18下）

Gトレンチの東に設定したトレンチである。客土の下は整地層で建物等の痕跡は認められなかった。遺物は近世陶磁器が僅かに出土したに過ぎない。

(2) 出　土　遺　物

瓦類（挿図9～12, 図版19～21）

瓦類は、中世から近現代に至るものまで出土している。多くは、現位置をたもっておらず、整地層から出土したものである。

軒丸瓦には室町時代の所産と見られるものが2種類。近現代とみられるものが1種類出土している。そのほか、現代に近いものがあるが紙面の都合で割愛した。出土した瓦をグループでまとめる

とI類（1．2．4～13）、II類（3．14）、III類（15）となる。

軒丸瓦I類：中型の瓦で、量的にはもっとも多く出土した種類である。直径は約14cmで、内区は頭部を丸く仕上げた「おたまじゃくし」形をした右回りの三巴文である。頭部は互いに中心から4mm程度の間隔をもった位置にある。巴文の圏線は、さほど長くはなく、頭部から計って全体から見て1／2周程度である。巴文の外側には21個の珠文が規則正しく配されている。周縁の幅は約15mmで、高さは約8mmを測る。素文である。瓦当面の接合は、丸瓦端部に粘土をあて、接合している。そのため、接合面にはユビオサエの痕跡とナデ調整の痕跡がのこる。

軒丸瓦II類：I類に比べてやや小振りで、直径は、12cm程度である。内区は、頭部の丸い右回りの三巴文である。圏線は、I類に比べて長く、3／4周程度まわるようである。珠文が配されているが、残存状況が悪く個数についてはわからない。

軒丸瓦III類：大型の瓦で直径20cmを測る。内区には、16弁からなる菊文が配されている。再建された伝法院に現在葺かれている瓦と同笵とみられる。

一方、軒平瓦には室町時代の所産とみられるものが7種類に分類できる。出土した瓦をグループ毎にまとめるとI類（17）、II類（18～22）、III類（23．24）、IV類（32）V類（16）、VI類（33）、VII類（25～31）となる。

I・II・III類：均整唐草文で、同系統の軒平瓦である。残りの良いII類（16）で計測すると顎の高さが3.8cm、幅21cmを測る。この系統の瓦は、現存する大塔の創建時の瓦（図版19　64）と同じ中心飾りをもっており、文様の変遷で見てみると大塔→I類→II類→III類となる。

IV・VI類：IV類は均整唐草文であるが、I・II・III類とは異なる特徴を有している。VI類については、不明確である。

V類：残存状況が悪く全体がわかる資料がないが、瓦当面の幅が約8cmを測る大型品で、内区には圏線が巡る。大塔創建瓦の亜種とみられる。

VII類：量的には、もっとも多い。瓦当中心には、右周りの三巴文が配されている。

その他の瓦では、鬼瓦（34.35.36）、玉縁付丸瓦（38）、不動明王をあしらった塼（39）が出土している。

土器類（40～44・46～55）：土師器の小皿が出土している。口径の小さなもので、7cm程度、大きなもので14cm程度を測る。器高は、1.5～3.5mmを測る。なかには、黒く煤けたものがあり、実際に燈明皿として利用されたものもある。

陶磁器（45・57）中国製の明代青磁碗が2点出土している。

国産陶磁器（58～62）伊万里系の磁器が何点か出土している。磁器は19世紀頃とみられる。

Ⅳ まとめ

今回の調査は、冒頭で延べたように大塔、大伝法院周辺の古絵図にみられる建物等について実態を把握し、その保存を図るための調査である。調査の結果、近世以降の土塀の基礎、あるいは大伝法院の再建にかかるであろう整地層を確認したに留まった。

この整地層は、出土した土師器皿の年代は、江戸初期とみられ、これは慶長5年（1600年）に徳川家康によって根来寺再興が許可された後、根来寺に学侶、行人僧の帰山が相次ぐ時期とある程度符号するとおもわれる。

一方、大伝法院東側で見つかった石列は、現状では、建物に付随するとは考えがたいが、周辺から出土する瓦類は、室町時代後半とみられることや、同時期とみられる土師器類が出土することから類推して、建物がかつて存在した可能性は高い。

門跡については、その遺構を確認するには至らなかったがそれに付随する可能性のある石列を検出した。

宝暦5年（1755）に描かれた「根来山絵図」に見られる塔頭については、検出できず、江戸以降かなり改変されていると見られる。

いずれにしても、天正前後の根来寺の隆盛時の遺構は検出できなかったが、近世以降の根来寺の様相がすこしではあるが解明できたのは成果といえる。

参考文献

『根来山誌』根来山誌編纂委員会　1986

『根来大伝法院700年記念根来寺展』根来寺展実行委員会　1988

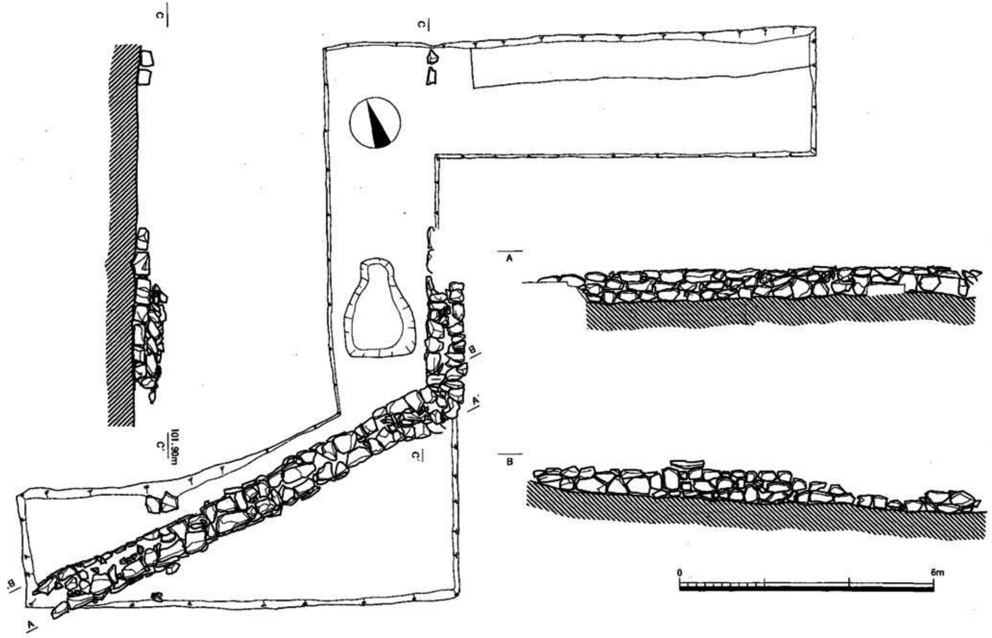
『根来寺に関する総合的研究』昭和57年度科学研究費補助金（総合研究Ａ）研究成果報告書　1983

小林謙一・佐川正敏「平安時代～近世の軒丸瓦」『伊珂留我』法隆寺昭和資材帳調査概報10　1989

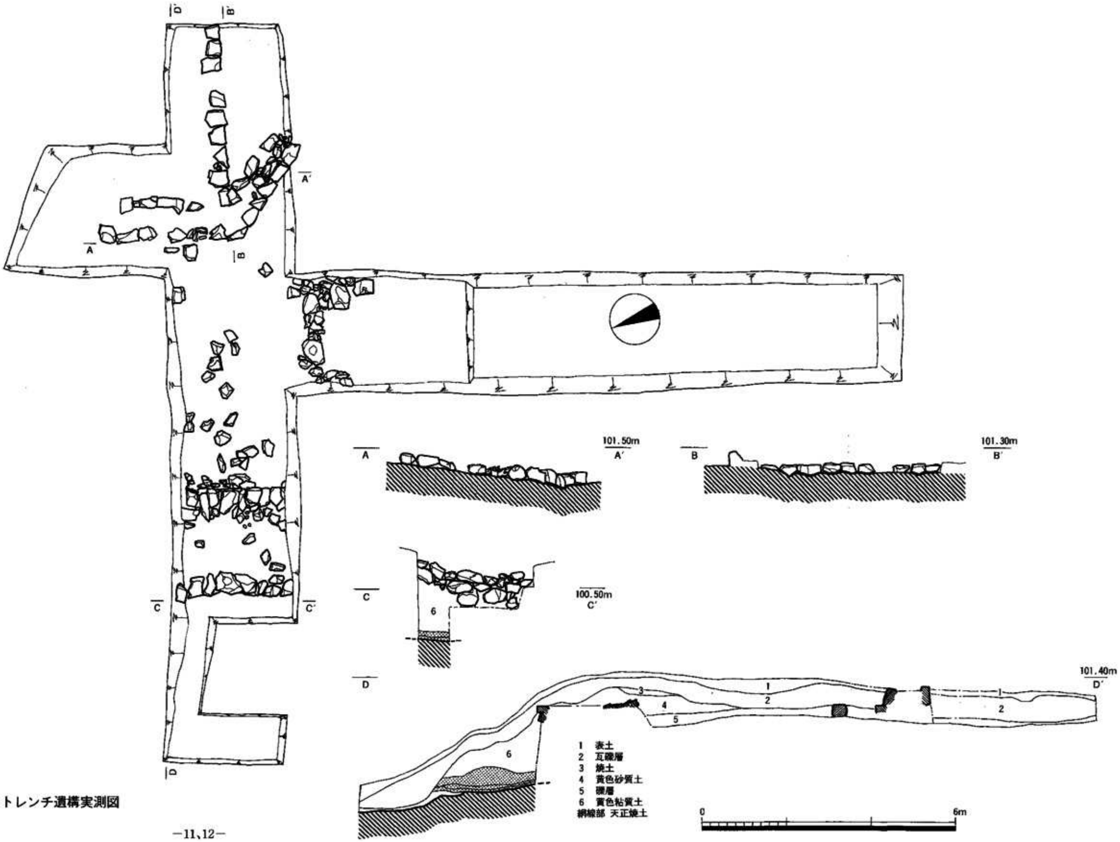
平成元年度『根来寺坊院跡』和歌山県教育委員会　1989

平成2・3年度『根来寺坊院跡』和歌山県教育委員会　1992

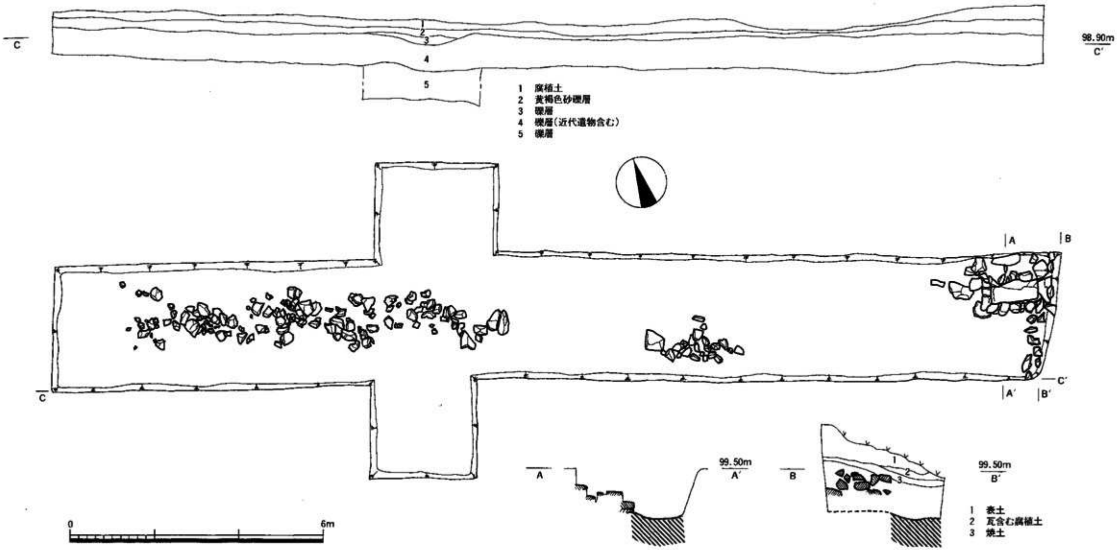
『根来寺坊院跡』－発掘調査10年の歩み－　1992



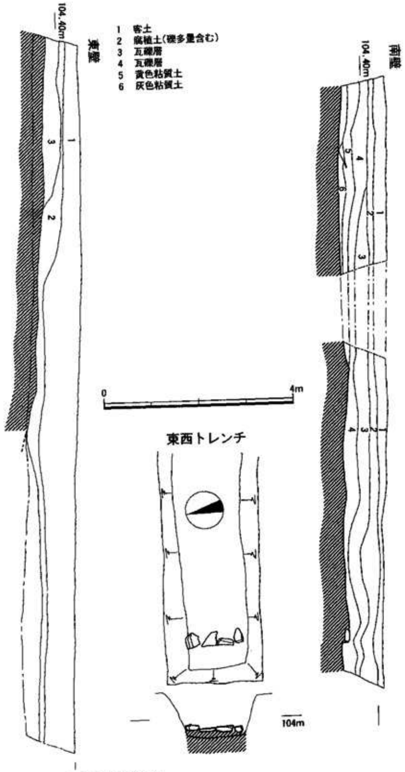
挿図４　Ｃトレンチ遺構実測図



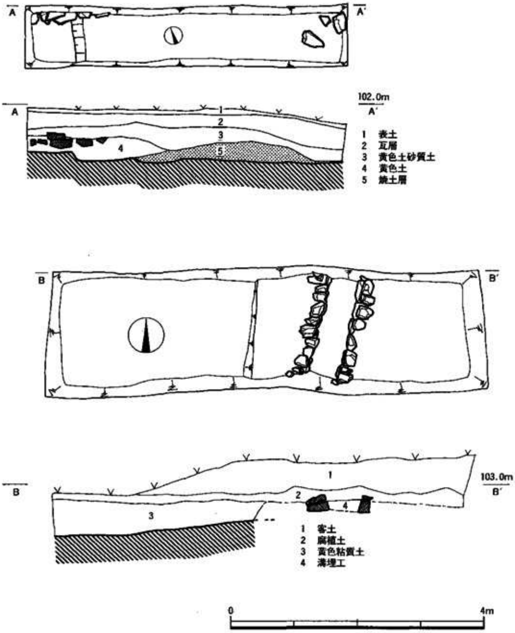
挿図5 Eトレンチ遺構実測図



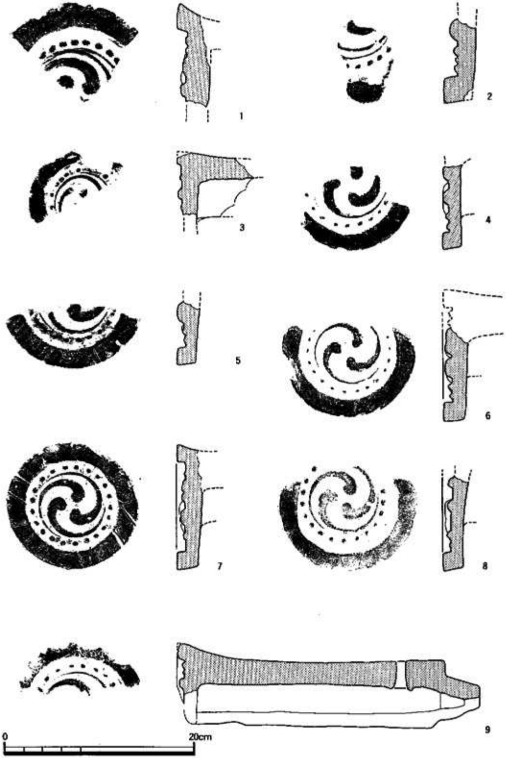
挿図6　Fトレンチ遺構実測図



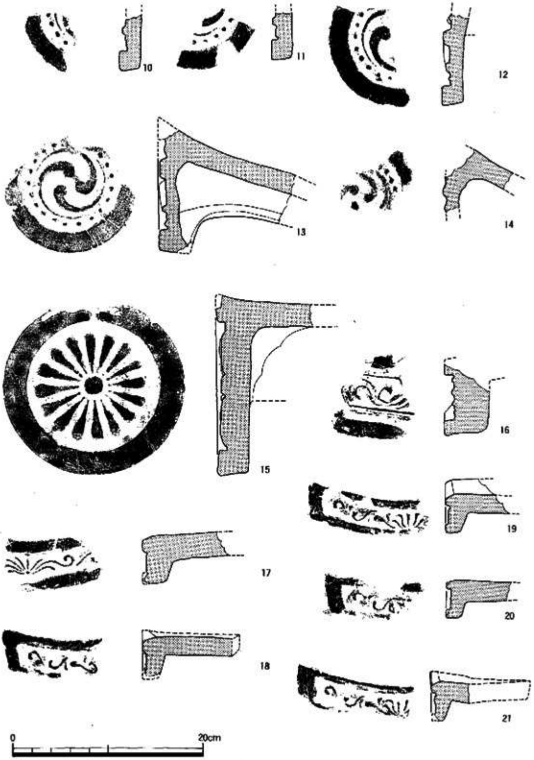
挿図7　Aトレンチ平面及び断面図



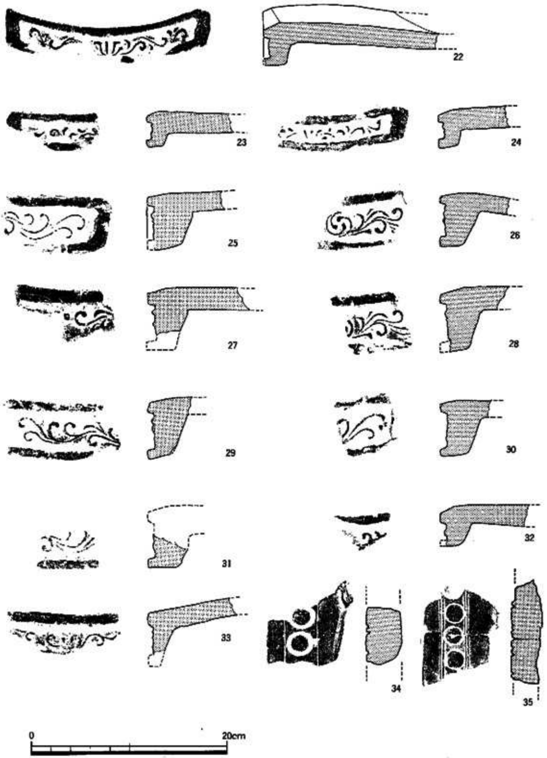
挿図8　D・Gトレンチ遺構実測図



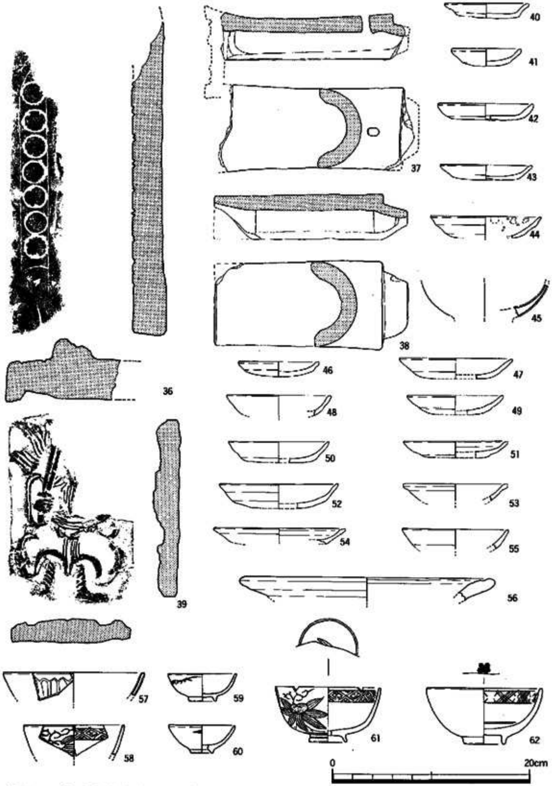
挿図 9　根来寺坊院跡出土軒丸瓦実測図



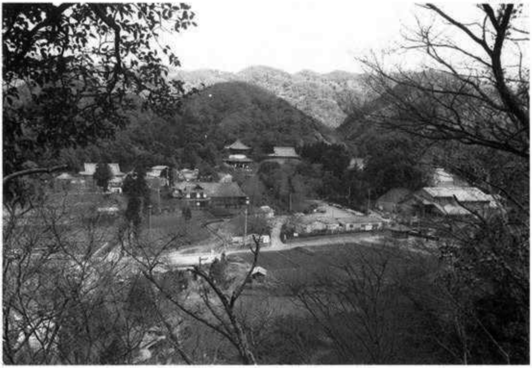
挿図10　根来寺坊院跡出土軒丸・平瓦実測図



挿図11　根来寺坊院跡出土軒平瓦・鬼瓦実測図



挿図12　根来寺坊院跡出土瓦塼類・土器実測図



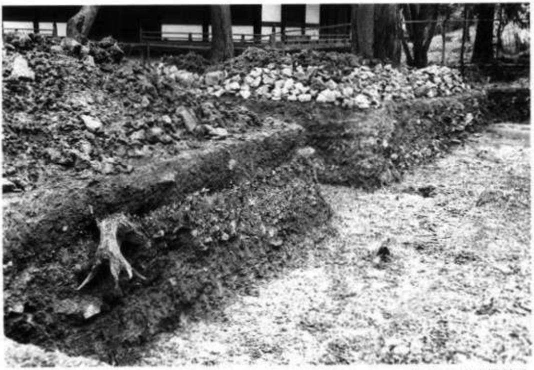
根来寺坊院跡全景

調査区近景

Aトレンチ全景

Aトレンチ

Aトレンチ石垣検出状況



Aトレンチ土層断面

Bトレンチ調査前

Bトレンチ調査風景

Bトレンチ土層断面

Bトレンチ整地状況細部

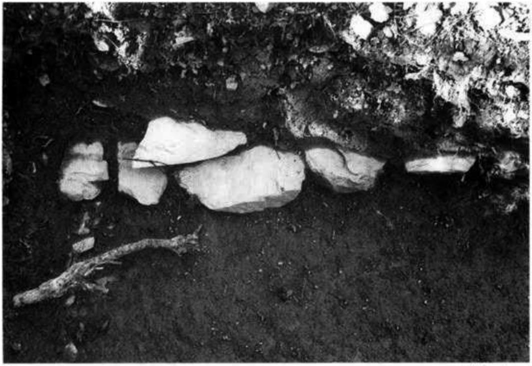
Cトレンチ調査前

Cトレンチ石垣検出状況

Cトレンチ石垣検出状況

Cトレンチ石垣検出状況

Ｄトレンチ全景



Ｄトレンチ石垣検出状況

Eトレンチ調査前

Eトレンチ全景

Eトレンチ石垣細部

Eトレンチ石垣細部

Eトレンチ石垣

Eトレンチ石垣細部

Eトレンチ全景

Eトレンチ下層断面

Eトレンチ下層状況

Eトレンチ下層状況

Ｆトレンチ調査前

Ｆトレンチ全景

Fトレンチ石垣検出状況

Fトレンチ石垣検出状況

Ｆトレンチ土層断面

Ｇトレンチ全景

Gトレンチ排水溝

Hトレンチ土層断面

1

4

5

6

7

8

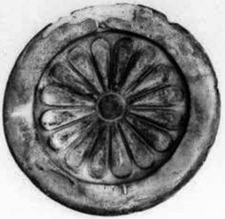
9

10

12

13

14



15

63

64

65

16

18

19

21

22

26

25

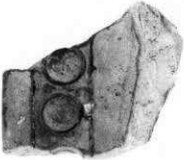
27

29

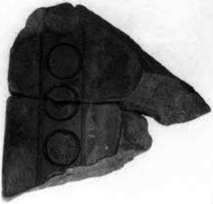
30

31

67



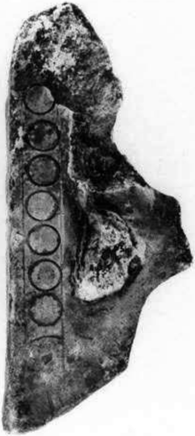
34



35

66

68



36

39

69

平成４年度

根 来 寺 坊 院 跡

1993年３月

発行 財団法人 和歌山県文化財センター

印刷 西 岡 総 合 印 刷 株 式 会 社